
とある日常の超常日常（アブノーマルデイリー）

ファルコン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アフノーマルデイルー
とある日常の超常日常

【Nコード】

N9236Y

【作者名】

ファルコン

【あらすじ】

とあるシリーズとアニメ「日常」をコラボさせた小説です。この小説は、もしも日常のキャラ達がとあるの世界に居たらという小説です。

能力名など少し間違った理解をしている可能性もありますので、その時は感想にてご指摘下さい（汗）

あと、キャラ崩れが激しいですがご了承をm（＿）＿m

#01 超常日常（アブノーマルデイリー）（前書き）

駄文でダラダラと進行していますがご了承を…

#01 超常日常（アブノーマルデイリー）

ここは日本のとある場所。そこに住む一人の少女「長野原みお」が居た。

「あーもうっ！！何で今日に限って目覚ましが止まってるのよ！！」

みおは慌ただしく仕度をしている。そこに、みおの姉の「長野原よしの」がまたぐりとした雰囲気で声を掛ける。

「あ、みお、おはよう」

「おはようって悪いけど今急いでるから話し掛けないで！！」

みおはそう言っただけで漫画によくあるような、パンを加えて学校へと走る。みおは普通はこのような事は無いのだが、やっぱり目覚まし時計が止まっていたが為に慌ただしく準備をせざるを得なくなってしまったのだ。

「ああもう！目覚ましも目覚ましだよ！止まるなら止まるって言ってくれば良いのに！！」

みおよ、目覚まし時計が喋るはず無いだろうよと思わずツッコみたくなる台詞をぶつぶつと言いながらひたすら学生寮から出て学校へと走る。走って走って走って…気付いたらあり得ない速度になってました、なんて事にはなっていないだろうか。

案の定、走るだけではあり得ない速度になっていた。物凄く速い…まるでどこかのアニメであるような能力を使っているみたいだ…。

というのもみおが住んでいる学園都市では学生を対象にした「超能力開発実験」が成されている。

「超能力開発実験」では無能力者から超能力者の^{レベル5}6段階に分けられ、これまでも様々な能力を開花させてきた。

また学園都市内の学生達は定期的に行われる「システムスキャン」
…要するに、どれだけ能力が使えるようになったかの試験^{テスト}をする事になっている。

ちょうどこの日も、システムスキャンの実施日であり、遅刻した場合^{レベル0}は評価されない。無能力者のみおにとっては致命的だ。

「とにかく、最速ラップを叩き出して学校に行かないとレベル0のまま…いい加減レベル0から卒業したいから急がないと！」

みおはとにかく走りまくった。そもそもみおの通っている学校…第七学区にある「時定高校」行きの交通機関が多くあるのでは？と思う。実際殆どの学生はバスやモノレール、地下鉄などを利用して時定高校まで通学している。交通機関を利用した方が早いのではないだろうか？

だがもう後戻りは出来ない、というか完全にみおにはもう能力が開花してバスや電車よりも速く走れている。やはりシステムスキャンではレベル0以上に昇格するのだろうか？

…まあ昇格するかしないかは置いて、みおはあっという間に学校へと辿り着く。と言っても時定高校には学生寮があり、すぐ近くのだが。

なお、学園都市内では高性能な機械、有能な教師陣など、環境が優れている。

その優れた環境の下、学園都市内の全ての学生は日々の能力開発に

取り組んでいる。

みおは呼吸を安定させて、学校の中へと入っていった。何とかシステムスキヤンの時間までに間に合ったみたいだ。

「あ、みおちゃんスラマツパギー！」

こう明るく話してくるのは「相生祐子」だ。みお曰く、バカで寒いダジャレをいつも言ってる友達だとか。

「ゆっこ、麻衣ちゃんおはよう。いやあ、私としたことが、ちょっと遅れそうになったよ」

「おはよー…」

この、物静かな雰囲気的人物は「水上麻衣」。彼女は学内でもある組織に所属している。

「あれ？そう言えば麻衣ちゃんは、ジャッジメント風紀委員の仕事は無いの？」

「ジャッジメント風紀委員の仕事は、今のところは何も事件が無いから、仕事は無いよ…」

「そうなんだ。それなら、今日一緒に帰れるね」

麻衣は「そうだね」と静かに言っただけでまた本に視線を戻す。麻衣が所属しているある組織と言うのは第178支部所属のジャッジメント風紀委員だ。この組織は、学園都市の能力者達による治安維持機関だ。

しかしあくまで学園都市の生徒達による組織である為、重大な任務に就かされる事は無い。また、風紀委員になる条件にはレベルは問

わない。風紀委員は実に、レベル0からレベル5まで（ただしレベル5の学生の風紀委員は居ない為実質的にはレベル4までである）様々だ。

因みに、麻衣の能力は空間移動テレポートを持つ大能力者レベル4だ。

この空間移動テレポートは、自分や触れた物体を瞬時に転移させる能力。自分を転移出来るようになれば、レベル4として認められるようになる。また、その能力を使う能力者の名称は空間移動能力者テレポーターと呼ばれ学園都市内では比較的貴重な能力とされている。実際に空間移動能力者は238万人居る学園都市の学生のうち58人程度だ。

と、チャイムが鳴り放送が入る。

『今日はシステムスキャン実施日です。生徒は速やかに試験場まで来なさい』

「あ、今日システムスキャン実施日だっけ。いや、すっかり忘れてたよ」

この時みおは思った。ああ、今度もまたゆっこはレベル0なんだろうなあ、と。そりゃあ、システムスキャン実施日を忘れてるんじゃないか、と。

しかもみお曰く、ゆっこは勉強とか苦手だから低能力者レベル1になるのも難しいんじゃないか、との事だ。

そんなレベル0の祐子だが、勉強は苦手だがその分運動が得意な為、身体能力的には高い。その力を超能力開発に活用出来ればかなり良いのだが…。

さて、そんなこんなでみお達は試験場へと向かう。麻衣は支部へと

向かう事になっている。

「今日のシステムスキャンでレベルが上がると良いなあ…」

「みおちゃんなら大丈夫だよ。私も今日レベル上げるつもりだしさ」

「え？ゆっこレベル上がるの？…まあ頑張ろうっか」

みおと祐子は話しながら試験場へ急ぐのであった。

その頃麻衣は、ある男子学生と共に支部へと向かっていた。黄色いモヒカンが特徴の男子だ。

「…ん？どうしました？水上さん」

「…このモヒカン…凄く気になると思っ…」

「あ、このモヒカンはまあその…自然に生えた物ですよ。でも、心の中は全然危険では無いです」

この表現的に少し可笑しい話し方をしている男子は「中之条剛」だ。彼は麻衣と同じ第178支部所属の風紀委員ジャッジメントの一員。異能力者で能力が読心能力と、大した能力者では無いが情報収集の速さがピカイチ。その為基本的には室内で時定高校を含めた学園都市の治安状況をパソコンを使って常時監視する。

因みに、読心能力というのは思考を読み取る能力だ。この能力者の総称は読心能力者サイコメトラ。また、詳しく言うと、人から直接思考を読み取ったり、遺留品に残った思念を読むというタイプも居るそうだ。ただレベルが低いと、例えば落とし物から読み取れるものは落とし主を調べる程度に止まる場合もある。

中之条は風紀委員がギリギリで就く事が出来る重大な事件の際には

犯人の特定、災害状況など全て彼の頭脳で把握される。そして麻衣とコンビで活動していて、遠隔通信で麻衣に的確に指示し事件に対して迅速な処置を施す。

実際、彼のおかげで事件を安全かつ迅速に処理出来ているようなものだ。裏で活躍する中之条、表で活躍する麻衣と言ったところか。

しばらくして、支部へと着いた二人。

「皆さんおはようございます」

中之条が挨拶をして中へと入る。

「おう、中之条、おはよう」

「あ、田中君おはよう。今日も大きな事件が無いと良いね」

中之条と話しているのはアフロヘアで霊媒体質の「田中」だ。

彼は^{レベル3}強能力者で能力は^{エアロシユーター}風力使いだ。

^{エアロシユーター}風力使いの呼称には「風使い」、「大気操作能力」などもあるが区別は不明だ。

また、どのような能力かと言うと、気体ないし風を操作する能力である。

「まあ最近はある能力を使った事件が急増してるんだよな」

「え？何？」

「確か…空力使いエアロハンドの能力を使って、学生や一般人を狙って物を上空から落とす事件だったと思う…」

麻衣はとある能力者によるある事件、麻衣を含めた風紀委員の学生達は「エアロ事件」と呼んでいる事件を知っていた。これは、麻衣の言う通り空力使いエアロハンドという、触れた物体に空気の噴射点を作り対象を自在に動かす、要するに気流を操作する能力だ。この能力による事件が急増しているとの事らしい。

「でも、いったい誰がこのような事をしてるのかな？」

「分からん。ただ、同じような能力を持っている俺からすれば、許せない事件だな」

「…そうだね。一刻も早く事件を解決しないと…」

中之条は早速パソコンを点けて調べる事に。まずは学園都市内の書庫シラへアクセスし、空力使いの能力を持つ学生の情報を調べる。だが、今までも田中が時々調べていたのだが、誰が犯人なのか未だに特定できていないのだ。

犯人を特定しなければ、より一層危険になる。中之条はそう思い、犯人の特定を急ぐ。

一方で、システムスキャンを行っているみおと祐子は…。

「…ではこれより1年Q組長野原みおのシステムスキャンを行う。」

では、始め!!」

みおは集中し、自身に秘められている能力を少しずつ開放する。

「みおちゃん大丈夫かなあ…」

祐子は少し心配していたが、システムスキャンは問題なく行われる。しばらくすると、みおの体の回りからは炎が少し渦巻く。どうやら以前と比べ少し能力が使えるようになってきてはいるようだ。

「…今回の長野原、どうやら上手くいきそうですね、桜井先生」

「そうですね、高崎先生」

システムスキャンの監督の一人「高崎学」はみおの様子を見ながら隣に居る教師「桜井泉」に話しかける。高崎は教師（大人）達により構成された警備員アンチスキルのメンバーだ。管轄は風紀委員が校内なのに対し警備員は原則的には校外を管轄としている。

さて、みおの周りには炎が渦巻いている。後はその炎を自分の物にする事が出来ればレベルは上がる。

「……っ!!」

みおは次の瞬間、炎を前方へと勢いよく放出した。だが威力は低い。判定結果は……。

「…長野原みお、審査により発火能力パイロキネシスを有する強能力者レベル3と判断する」

「え……?」

みおは一瞬止まっていたが、その後に祐子が声を掛ける。

「おお、みおちゃん良かったじゃん！」

「やった…今日からレベル3なんだ！！いきなりレベル3になれるなんて夢のようだよ！！」

みおは喜んだ。何せいきなりレベル3になったのだから。そして能力名は発火能力。これは総じて火や炎を生み出し操作する能力。そしてこの能力者の総称は「バイロキネシスト発火能力者」だ。その後、祐子も同じくシステムスキャンが行われたが、結果はいつもの通りレベル0のままだったという。

そして放課後、第七学区商店街にて―。

「…あ、麻衣ちゃんお待ちせー。それじゃ、帰ろっか」

みおは祐子、麻衣と一緒に帰る事に。試験後に配られた用紙には、やはりこう記載してあった。

『1年Q組 長野原みお
バイロキネシス
発火能力の適正有り』

このプリントを嬉しそうにカバンにしまって、みおはもう満足そうだ。一方の祐子は…。

『1年Q組 相生祐子
能力適正無し』

「ま、まあいつもの事じゃん、ゆっこ」

「そりゃそうだけど…」

祐子はげんがりしていた。そりゃあ勉強を疎かにしているようでは能力も開花されないだろう。しかも、バカだから能力開発しようにも難しい。

気分を変える為にみおが話し掛ける。

「…そ、そうだ、今日セブンスミスト立ち寄ってみない？」

「…そうだね。みおちゃんもレベル3になったし、お祝いに何かしよっか」

祐子達は、第七学区商店街内にあるセブンスミストという店に立ち寄って買い物をしていく事に。このセブンスミストは、衣類品は勿論のこと、生活雑貨や食料品など様々な品揃えだ。

そこで祐子はみおの、レベル3に上がったお祝いにと食料品を買ってパーティーでも開こうというのだ。なお、麻衣の寮でパーティーを行う事になっている。

「…あ、そうだ、今日なのちゃん学校に来なかったけど誘っていいかい？」

「おお、良いね。せっかくだから誘おうっか」

祐子、みお、麻衣の三人はロボット女子高生「東雲なの」の家へと行き、買い物、そしてパーティーに誘う事にするのであった。

#01 超常日常（アブノーマルデイリー）（後書き）

文章が可笑しいかも知れませんが次回からはきちんと書いていきます（汗）

あと、ゆっことちゃんみおのキャラが同じになりがちですがご了承くださいませ（汗）

#02 電撃使い（エレクトロマスター）（前書き）

2話目は原作のキャラの御坂美琴も使っているあの能力が、なののが能力だという設定です（笑）

#02 電撃使い（エレクトロマスター）

祐子、みお、麻衣の三人は東雲なの家…東雲研究所に来ていた。

「なのちゃん！！遊びに来たよー！！」

「あ、相生さん！それに長野原さんや水上さんも！」

「えへへ、実はねー今日みおちゃんがレベル3になったんだよー」

祐子は今日のシステムスキヤンの事を話した。勿論、祐子自身の結果…レベル0のままだと言う事も。

「…そうなんですか、長野原さん、おめでとーございます！」

「うん、ありがとう、なのちゃん」

みおは少し照れていた。彼女も今日からレベル3の、そして発火能力者の仲間入りだ。

なのは玄関で立ち話も何だからと、祐子達を家に入れる。普通学生は学生寮を利用しているが、なのの家は第七学区にある時定高校に近い為自宅から徒歩で通学している。

またなのはロボットでありながら人間並の脳を持つ為、能力を所持している。人間並と言えど脳自体は機械ではあるが…。

「そう言えばなのちゃんって確かー…」

「確かなのちゃんエレクトロマスターの能力って電撃使いだったよね？」

「はい、そうですが…それがどうかしました？」

「いや、凄いなあ…って思ってたね…しかもなのちゃん学園都市でも七人しか居なかったレベル5の一人になってるからねー」

みおと祐子は羨ましそうにしていた。なの^{レベル5}は超能力者である事を否定しているが…。実際、なの^{レベル5}はレベル5級の能力者なのだが今日行われたシステムスキャンを受け損なった為まだ大能力者^{レベル4}となっており、能力は電撃^{エレクトロマスター}使いだ。この電撃使いは発電能力とも呼ばれ、総じて電気や磁力（電磁波など）を操作する能力だ。またこれを使う能力者の総称を発電能力者、または能力名と同じ電撃使いとしているが区別は不明だ。

「わ、私はレベル5では無いですよ…」

「でも理論上はレベル5なんだよね？」

「そうかも知れませんが…レベル5では居たくないです…戦う為だけに能力を使うなんて…そんなの嫌です」

「なのちゃん……」

なの^{レベル5}は少し悲しそうにしていた。と言うのも、なの^{レベル5}は争いごとが嫌いなのだ。実に平和を望んでいる能力者と言えるだろう。

学園都市では、能力者同士の争いが激しい。誰が一番強い能力者か…自分が持つ能力を使って戦う事もしばしばある。だがなの^{レベル5}は、それでは超能力開発が意味を成さないのでは、と思っている。

あくまで実験として行っている超能力開発だ。それを戦う為の道具

に応用するのはどうだろうか。超能力は戦争を引き起こす為にある物では無いのだ。

「…ま、まあレベル5は戦うだけじゃないと思うし、なのちゃんはなのちゃんが良いと思うんだ」

「相生さん…そうですね。今回のシステムスキャン、はかせが力ゼ引いて熱を出しちゃって…それで看病していたので逃してしまいました。次回はきちんと受けようと思っています」

祐子達は頷き、みおの誕生パーティーに誘うかどうか迷った。すると奥から寝込んでいたはかせが歩いてくる。

「なのー…ゆつこ達の所に行つてきても良いよー…」

「わあっ！？はかせ、ダメですよ寝てないと！」

「だいじょぶ…ちゃんと頑張つて薬飲んだから」

はかせはまだ熱が少しある為顔色が悪いが力ゼを引いた直後よりは良くなっている。実ははかせ、なのを作った天才的な頭脳を持つ8歳の少女なのだ。

また、はかせとほぼ一緒に居る阪本さんと呼ばれる猫に喋れる赤いスカーフを開発したのもはかせ。阪本さんの第一声、というか外見とギャップがある声にはかせとなのの二人は衝撃を受けたとか。

はかせは能力者では無い為、能力を持たないが超能力開発にほんの少しだが携わっている。

そしてはかせは最近頻発している空力使用エアロハンドの能力を使ったエアロ事件にも目を向けている。エアロ事件の犯人は能力者としての恥だと

言われる事だろう。

その為度々風紀委員、警備員と共に事件の情報収集を急いでいる（
具体的には被害状況、犯人の特定など）

「はかせ…では、お言葉に甘えて、相生さん達のお祝いパーティー
に行ってきますね」

「うん…行つてらっしゃーい」

なのは仕度をし、お祝いパーティーに行こうとしたが祐子が一言。

「ねえ、なのちゃん…はかせも一緒にパーティーに誘わない？」

「え…？あ、いや、その…はかせはカゼを引いてるので……」

なのがそう言いかけたが、途中から物凄い元気の良いはかせの声
がした。

「やっぱりはかせも行くー！！」

「え？はかせ大丈夫なんですか！？さっきまで顔色が悪かったのに
…」

「はかせはだいじょぶだけど」

はかせは先ほどまでと比べて、かなり変わっていた。まず顔色は一
瞬で良くなり、そしてカゼを引いたとは思えないほど元気に動い
ていないか。

まるで一瞬で病気が吹き飛んだみたいだ。言い換えれば、仮病して
たみたいだ…。

「…もしかしてはかせ、私を騙して仮病とかしてないですよ？」

なのは少し怒り気味にはかせに問う。と言うのも、はかせが力ぜを引いている時大好物のお菓子を沢山食べていた（詳しく言うとなのに無断で多く食べていた）からだ。

はかせはそつぽを向きながら言い返す。

「け、仮病？な、何の事かはかせはさっぱりだけど」

「はかせ何でそつぽを向くんですか？」

「そつぽだからかも知れないから」

なのは「意味が分かりません」と言っではかせの口の周りを見る。

するとそこにはやはりお菓子のかすが付いていた。

この一連の様子を見ていた祐子達は、一旦帰る事に。

「…それじゃあちよつと私達は食材とか買ってくるから帰るね…」

「え？あ、はい…後ではかせと一緒に長野原さん達の寮に行きますね」

なのは祐子達と話す時には急に声を変えていた。そして祐子達が帰った後またはかせに視線を戻し、ため息をつきながら一言。

「はあ…まあ、今回はきちんと薬も飲んでくれましたし、今回だけは良しとします」

「なの……」

はかせは涙目になっていた。なのは何て優しいんだろうか。なのは笑顔で、はかせに近寄り、またはかせもものに近付いた。そして二人の間には何とも暖かな雰囲気ぐ漂うのであった。それを影からどこぞの黒猫が一言。

「…あいつら何やってんだ？」

話しているのは阪本さん。阪本さんは今までの状況を知らないの少し戸惑った様子になっている。

「さて…はかせ、相生さん達の所に行きますよね？」

「行く行くー！阪本は置いて行くー！！」

はかせは今はずきりと言った。阪本は置いていくと。それを聞いた阪本が飛び出す。

「おいガキ、別に俺を置いていくのは構わんが、何度も言ってるようにさんを付けろと言ってるだろ？」

「そだった。阪本ごめんなさい」

「おい…今の話ちゃんと聞いたか？」

「だからごめんなさい、阪本」

阪本さんは思った。ああ、ガキはやっぱ話が分かってねえな、と。その後、阪本ははかせにいつまでも阪本と呼び捨てにされるのであった。

その頃、第七学区商店街に戻っていた祐子達は…。

「んじゃあまずは食材買おうつか」

祐子達はセブンスミストにて買い物をしていた。まずは食材探しだ。

「今日の夜は楽しみだなあ」

「…あ、そういえば…」

「ん？どうしたの？麻衣ちゃん？」

「ちょっと私は支部の方に戻るよ…忘れ物したかも知れないから…」

そう言つて麻衣は風紀委員の支部へと戻る事にした。二人は少し気になったが、買い物続ける。

そしてあつという間に夜が来た。麻衣は予定通り祐子達と合流し、なのとはかせも連れて麻衣の寮へと向かう。

麻衣の寮は実のところ広く、かなり落ち着いた空間がある。

「さ、入って…あまり片付いてないかも知れないけど」

麻衣の寮に着き、皆は入っていく。やはり麻衣の寮は広い。広すぎるくらいだ。

早速祐子達は麻衣の手も借りて、お祝いパーティーの準備に取り掛かる。だがはかせと言うと…。

「すごーい！！ひろーい！！！！」

「は、はかせ…ダメですよ、水上さんの寮なんですから…」

「…別に良いよ。後で、サメの絵でも描こう」

「サメ…！！うん、描く描く！！」

「サメ」という単語を口にするとはかせは嬉しそうにした。実ははかせはサメが大好きなのだ。変わりにイヌが嫌いらしい。それはもう、イヌを目の前にと怖くて動けなくなってしまうという。

そうしていつもの日常を、しかし学園都市外の一般人から見れば超能力を有しているという、学生の間では常識になっている非日常な生活を過ごしていく。人々はこの日常のようで日常でない生活を^{アブ}超常日常と呼んでいる。

…と、麻衣の寮が急に暗くなった。停電だろうか。

「え？ひよ、ひよっとして停電！？」

「なのー！どこに居るのー！！」

「わ、私はここです!!」

「どこー!？」

祐子達は戸惑ったが、一人この状況で役に立つ人物が居るのではないだろうか？そう…電撃使いのなのだ。祐子は真っ暗な中なのに声を掛ける。

「そうだ…なのちゃん今電撃使える？」

「え？あ、はい…ちょっとやってみますね」

なのは壁を伝ってブレーカーらしきところに辿り着く。

「ここかな？じゃあ行きますよー」

なのの指先から電流が流れる。すると、電気が復帰し部屋は明るくなった。流石は電撃使い、電気機器の操作はお手のものと言ったところか。

「ふう…なのちゃんありがとう」

「いえいえ、私の能力も持っているだけだと勿体無いので…」

持っているだけだと勿体無い…？まあ、なのは争いごとが苦手なので争いには使わないはずだが…。

さて、祐子達は再び雑談を交わしながら準備を進める。そして、楽しい楽しいパーティーの始まりはもうすぐそこまで来ていた。

「さてと、そろそろだね、麻衣ちゃん」

「…そうだね、ゆっこ」

割と豪華そうな料理が並べられる。勿論、はかせ用のご飯も作って、準備は万端だ。

「ふう…さ、レベル3になったみおちゃんを祝って、乾杯!!」

「えへへ、ありがと、ゆっこ。それじゃ、乾杯!!」

祐子、みお、麻衣、なの、はかせの五人は乾杯をして、食事を楽しく摂る。なんとも暖かなムードに包まれている。五人は仲が良く、親友の仲だ。祐子が思うには、はかせだけは能力が無いけどそんなの関係なしという。仲良くなるのに能力者でそうでない者の差別なんて必要ない。友達になりたければどんな人でも友達になれるのだ。

「でも、いきなりレベル3になれるなんて、凄いですね長野さん」

「うん、私も最初は信じられなかったよ。あと少しでなのちゃんと同じレベルだね」

「そうですね」

五人はパーティーを楽しむのであった。一方、第七学区のとある場所では…。

「…はあ…はあ…と、とにかく逃げる…上空を気をつけて逃げないと………」

ある男子生徒が何かから逃げている。周りには誰も居ない。そしてその男子生徒は上空を気にしているようだ。と、逃げる男子生徒の目の前に、鉄パイプが落ちてくる。

「ひいつ！！！」

ギリギリで男子生徒は避けるが、体は既にボロボロのようだ。何者かに襲われたのだろうか？しばらくすると、後ろから一人の男が…。

「…おい、何で逃げるんだ？俺は何の能力も使ってない。ただお前と遊びただけだぜ？」

「つ、使ってるじゃねえか！！空力使いの能力を…エアロハンドを…！！！」

「ああ、それか。いやースマン、どう抑えても力を使った事になってしまっんだよなあ…この素晴らしい力がな」

その男…空力使いの能力を持つ男はある物に触れる。それは…。

「でもさあ、アイツよりは俺は優しいと思っぜ。あの最強のヤツよりかはな」

「お前…その手に触れている物は…！！！」

「ん？ああ、鉄クスだね。粉々に砕かれて、鋭い…肉を引き裂くような鋭さの鉄クス…」

「そ、それをどうするつもりだ…！？」

男子生徒は息を呑みながら話す。どうするかというとそれはもう決まってる通り……。

「ふふ…悪いけどさあ…お前みたいな何の能力も無いヤツはここで死ね!!!」

その男は触れていた鉄クズを能力を使って素早く且つ勢いに乗せて男子生徒に飛ばした。その後「ぎゃあああああああ!!!」という悲鳴がその場に響くのであった…。

#02 電撃使い（エレクトロマスター）（後書き）

後半はある事件に繋がるワンシーンを描いてみました。どんな事件か…それは次回分かります。

#03 エアロ事件（前書き）

大変お待たせいたしました（大汗）

自分も何分現実の方で勉強などで忙しくて…本当お待たせして申し訳ありませんでした。

さて、今回はエアロハンドという能力による事件『エアロ事件』についての話です。少し表現が可笑しいかも知れませんがこの作品の仕様だと思って読んでください^^

#03 エアロ事件

次の日…祐子と麻衣、みおになのはいつもの通り学校へと向かって
いた。今回は余裕がありそうだ。

「…で、ゆっこ宿題とかやってきた？」

「宿題？んー…えっとー…」

祐子は少し答えに戸惑ったが、しばらくして自信満々にこう言う。

「宿題は、忘れてきたー！」

この時周りが一瞬沈黙に包まれたのは気のせいか？とみおは思った。
その後祐子が早速寒いダジャレを言う。

「地理の予習はばっちりだー！なんちゃって」

ほい来た。祐子の寒いダジャレにみお達は容赦なく無表情で迎え撃
つ。なのだけは固まっていたが。

「ひいっ…！！こ、こんな天気の良い日は、テンキーでも買った
やおうっかなー…なんちゃって…」

祐子は二人の無表情に何とか耐えながら寒いダジャレを連発する。
だが二人は全く動じない。自爆のようなダジャレを次に言う。

「うっ…、な、なら次は！アルミ缶の上にあるミカンー！！」

祐子は辛さに耐えられず目をつぶりながらダジャレを言う。そこま
でしてダジャレを言わなくとも良いと思うのだが…しかも定番で自
爆物のダジャレ、祐子はダジャレを言うのが本当に好きだ。

「…も、もうダメ…」

祐子は遂にギブアップした。無表情組の勝ちだ。毎度無表情組みが
勝っているので大した事では無いが。というかギブアップするのが
早すぎだ。

そんなどうでも良い事をしながら、いつもの電車を使って第七学区
時定高校まで向かっていく。

その頃、第178支部所属の風紀委員では…。

「…たく、昨日も男子生徒が殺されてんじゃないかよー!」

「うーん…僕がその人の心を読み取ってみると、犯人は赤い服装を
していて…それで茶髪の人だったよ」

「そついや中之条は読心能力サイコメトリーの持ち主だったよな」

「うん、まあ殆どは落し主を調べるくらいになるんだけど…」

昨日のある一件の事件…例のエアロ事件でまた一人の被害者が出た。
とある男子生徒の遺体が発見されたのだ。遺体の状態は見るも無残
な状態だった。

中之条は書庫バンクを調べて空力使いの能力を持つ学生を調べたが、遺体
から読み取った特徴のある学生は無かった。まさか学生では無いと
いうのか?

「どついつ事…?」

「…一つ聞いた事がある。物凄い空力使いの能力者が居るって話を…」

「え…? 誰なの?」

「確か…海藤大和だったと思うぜ…大能力者の…」
レベル4

「海藤大和… ちょっと探してみるよ」

中之条はパソコンを点けて調べる。すると、海藤大和は出てきた。田中の話通りレベル4で空力使いの能力者だ。髪色が茶髪で、顔はイケメンな感じ、赤色の服装といった感じた。

「能力名空力使いエアロハンドで大能力者の海藤大和…レベル4ごく普通の学生で見た目は事件を起こすような人柄では無い、か… だけど本当にこの人が犯人なんだろうか…?」
かいどうやまと

中之条は少し怪しく思ったが、海藤について調べる事に。

一方、祐子達は余裕で学校へと着いてそれぞれの席へと座っていた。

「えーと、今日は数学と世界史と… ま、授業が始まる前に用意すれば良いかな」

みおはカバンを開いて教科書を机の中に入れる。授業自体はごく普

通の学校とあまり変わらない。勿論、能力についての授業もあるが。

「…あ、あと今日は自分バーソナルリアリティだけの現実についての授業もあるんだっけ」

みおは自分バーソナルリアリティだけの現実についての授業がある、などという事を呟きながら机の上に筆入れを置く。自分バーソナルリアリティだけの現実というのは、能力発現の根本法則であり能力者が個々に持つ感覚の事を言う。「手から炎を出す可能性」や「人の心を読む可能性」など現実とズレた可能性を「自分だけの現実」で観測する事によって、認識によってミクロの物理法則を歪めて通常ではあり得ない現象を発生させる。能力の種別や性質は「自分だけの現実」の資質で決定されていて、後からそれや能力を変更する事は不可能となっている。

「自分だけの現実」についての授業内容自体はそんなに難しいものではないかも知れないが、祐子は毎回この授業で頭を抱えている。それはまあ、やはり祐子がバカなのとあまり勉強しないせいかも知れないが。

と、麻衣の携帯に一本の電話が入る。

「…もしもし、水上か？例のエアロ事件について犯人の特定が出来たからちよつと来てほしいんだ」

「…はい、今すぐ来ます」

『おつ、なるべく早くお願いな』

麻衣は携帯を閉じる。そしてカバンを置いて支部へと急ぐ事にしたが、みおが一声掛ける。

「麻衣ちゃん、何かあったの？」

「ちよつと、風紀委員の事で…詳しく話を聞きたかったら、支部まで来て」

「う、うん、分かった」

麻衣はそう言つて教室を出た。その後、祐子が一言。

「麻衣ちゃん、何があつたんだろう？」

「さあね、分かんないけど、気になるから行つてみる？」

「うーん…まだ時間あるし、ちよつと話聞きに行つてみよっか」

みおと祐子も麻衣の後を追つて話を聞きに行く事に。通常、風紀委員で無い者は極力行つてはならないのだが…。

一方、麻衣は支部へと向かつていた。麻衣は仕事が入ると普段とは少し違う性格になる。犯人の身柄を拘束する為に強気の姿勢を向け、場合によつては本気で能力を行使するという。普段物静かな麻衣からは考えられない。

「…エアロ事件の犯人、今すぐにでも拘束しないと…！」

麻衣は独り言を呟きながら支部へと急ぐ。なお、能力は使わず走って向かっている。学内で能力を使った場合厳しい処罰が下されるのだ。

他にも風紀委員には厳しい処罰がある。例えば、管轄外の場所で活動をするとか始末書を書かされる。また、支給される装備を使用して始末書を書かされるのだ。

そんな、厳しい処罰がある風紀委員だがそれでも憧れて志願する者は居る。麻衣もその一人なのだ。

「先輩、今来ました」

麻衣は支部へと辿り着いた。そこには田中、中之条の他に麻衣達の先輩にあたる上級生の「朝倉武夫」が居た。彼は念動能力テレキネシスを持つ大能力者^{ベル4}。人柄が良く仲間想いで、困っている人を見かけると助けずにはいられないという、何とも優しい性格の持ち主だ。大げさに言えば人類が見習うべき人間と言えるだろう。

「お、水上来たか。早速だがこいつを見てくれないか」

武夫は麻衣に、中之条が見つけた情報をパソコンを通して見せる。

「これが…犯人…？」

「ああ、そうだ。見た目は良くても、学園都市内のあらゆる場所でこいつが事件を起こしているんだ」

武夫は静かに話す。海藤大和が何の目的で事件を起こしているのか、それはまだ分からないがこの一連の事件を起こしているのを見ると、能力者としての恥だ。

しかし、身柄を拘束するにあたって戦闘になる可能性が伺える。その場合、タダでは済まないかも知れない。相手は大能力者^{レベル4}だ。一筋縄では行かないだろう。たとえ、麻衣でもだ。

「…それで、いつ身柄を拘束しますか？」

「出来るだけ早い方が良いしな…中之条、奴の居場所を読み取れるか？」

「やってみます」

中之条は気を集中させる。そして、すぐに居場所は特定出来た。第七学区内の小さい通路である。

だが、中之条が能力を使って場所を特定した途端、大和の居場所が分からなくなってしまった。逃げたのだろう。

その後も察知するがすぐに逃げられ…の繰り返しで中之条も疲れていた。諦めて監視カメラで居場所を見る事に。

「すみませーん、ちょっとお話を聞きに来たんですがー！」

みおと祐子の二人が支部へ来た。麻衣が中へと入れ、話を聞かせるよう、武夫に持ちかける。

「…まああまり事件に関わりない人に教えるのは気が引けるけど、どうしてもっていうなら教えてやろうか」

早速武夫は二人に話をする。例のエアロ事件は、被害者が12人。全て学生で分け隔てなく攻撃している。また、場所は決まっておらず様々な所で起きている為犯人の居場所が特定出来ても現場に向かう時間が生じる為、結局は身柄を拘束する事が困難である。

「…それならどうするんですか？」

「しばらく奴を見張る。俺らが動かなければ相手も油断するだろうし。だからだ、全校生徒にも放送で流すが、今後は上空から物が落ちてくる可能性があるから帰りとかは気を付けてくれ」

祐子とみおは返事をした。油断させて相手の身柄を拘束するのは風紀委員の間では基本中の基本だ。何か変化が起きなければ何れ心に油断が生じる。そこを突いて安全に、戦闘は極力控えて身柄を拘束しようという作戦だ。

そして祐子、みお、麻衣の三人は授業が始まるので教室へと戻った。

一方その頃、第七学区のとある場所ではまた一人の学生が大和に襲われていた。その学生も無能力者だ。レベル0

「…たく、面白くねえな。無能力者って言ったって僅かに能力はあるだろ？そいつを使って俺と戦ってみろよ」

大和はエアロハンドの能力を駆使して物体を飛ばしていく。学生の悲鳴が通路に響く。そしていつも所持している鉄クズを手に持ち、能力を使って飛ばそうとしたが大和は直前で止めた。

「…どうやら奴らが来たようだ。一度撤退するか」
風紀委員

大和はその場から一瞬で消えた。その後、予想通り風紀委員が来て、生徒は救助された。

そうしてしばらくは被害が出る事も無く、授業も問題なく進んだ。そして祐子、みお、麻衣、なのの四人は一緒に帰宅する事にした。

「今日はどこに行く？」

「うーん…今日は特に行きたい所は無いよ」

「それに事件の事もありますし、早めに帰った方が良いかも知れませんが」

四人は話しながら帰路を歩いていた。というか祐子達は毎日帰りにどこかに寄ってるのだろうか、と問いたくなる。

そんな会話をしながら帰っていると、なのが捨て猫を見つける。阪本さんでは無いが黒色の子猫だ。

「ああ…！可愛い…！！」

「ホントだね」まるでなのちゃんの家に居る猫さんみたいだね」

「ゆっこ、あまりベタベタ触ると噛まれるかも知れないよ？」

みおは祐子にそう言いつつもあまりの可愛さにベタベタ触る。麻衣は後ろで見ていただけだが…。

…と、麻衣はふと上を見た。何か物のような…凶器のような物が祐

子達の頭上を……。

「……！！みんな、そこから離れて……！！」

「え？麻衣ちゃん何か言った？」

麻衣は答える前に能力を使って祐子達を無理やり子猫の前から引き離れた。その直後、物が素早く落ちて音が響いた。その数メートル先には大和が居た。

「うわっ……危なかった……麻衣ちゃんありがとう」

「良かった……ちよつと先輩達に連絡するから待ってて」

麻衣は携帯を取り出し、支部へ連絡する。

「もしもし、こちら178支部所属の風紀委員、水上麻衣です。エアロ事件の犯人を今見つけましたので、これより身柄を拘束します
！！」

麻衣は携帯を閉じ、逃げる大和を追う事に。

「麻衣ちゃん！！」

「ゆっこ……今から仕事だから、また今度一緒に帰ろう」

麻衣は微笑みながら去っていった。その後、しばらく黙り込んでいた三人は……。

「……麻衣ちゃん、大丈夫かな……？」

「…多分大丈夫だよ、ゆっこ…さ、それよりも私達は帰ろうよ」

「そ、そうですよ。関係の無い私達は事件に関わらない方が良いでしょう」

「…そうだね。麻衣ちゃんなら大丈夫だろうし、私達は帰ろっか」

祐子は少し心配しつつも自分達の寮に帰る事に。なのは家が近くにあるので家に帰る事になるが。

一方、麻衣は大和を追っていた。大和は足も速くなかなか追いつけないでいたが…。

だが、大和は工事が途中で止まったビルがある場所で足を止めた。まさかもう白状するのか？

「フツ…なあ…そんなに俺を捕まえたいか？」

「当たり前…！！あなたを事件の犯人として拘束する…！！」

「…出来るものならやってみるんだな…！！」

大和は近くに落ちていたナイフを能力を使って麻衣に飛ばす。だが麻衣はヒラリと避けた。

「甘い…！！風紀委員をなめないで…！！」

麻衣も能力を使い、触れた物質を大和に向けて移転させた。大和は避けるが、少し当たってしまった。

「クッ……！！……なかなか楽しませてくれるじゃねえか。本気で行くぞ……！」

大和はあらゆる物体に空気の噴射点を作り、一斉に麻衣に向けて飛ばした。流石の麻衣も避けきれず、当たってしまう。

「……っ……！！……いきなり、マズイかも知れない……！」

「おらおら、どうした……！！もつと俺を楽しませろ……！！」

大和は容赦なく飛ばしていく。そして土煙がその場所に舞った。ビルにも少しヒビが入る。

「……ふん、本気でやればすぐこれかよ。まあ……あのビルの中に逃げたみたいだし、少し大人の鬼ごっこでもして遊ぶか」

大和は廃墟となったビルの中へと入っていった。麻衣は大和の言動通り、ビルの中へと逃げていた。鋭利な物などが当たり、傷を負っている。

「……もう少しすれば……警備員の人達が来るはずだから、それまで耐えよう……！」

麻衣は腹部を軽く押さえ、ビル内を逃げ回る。だが大和の声がした。

「ふん……風紀委員の実力はそれだけか？もつと俺を楽しませろよ……！」

「……!!とりあえず、逃げて回復しないと……!!」

麻衣は能力を使って逃げる。その後大和の声はしなかったようだ。

しばらく逃げ続け、麻衣はほんの少しだが傷が癒えた。が、まだ体に響くようだ。

「さーて、もう鬼ごっこは終わりだ。……お前を殺す!」

大和はどこに居るか麻衣は見えなかったが、どこからかアルミ缶が飛んでくる。その時、麻衣はある事に気付き早急にその場から離れた。

ある事とは……そう、アルミ缶は爆弾にもなるという事だ。麻衣の予測通り投げ出されたアルミ缶は爆発した。

アルミ缶を急速に圧縮する事で生まれる科学的エネルギーを利用して、爆発に導く。その爆発の威力は、最大で防弾素材で作られた大きな施設を小さな缶一つで全壊にするほどの威力だ。

大和の物は比較的小さなエネルギー^{エナジー}な為、人体に対して殺傷能力がある程度に留まっている。

黒煙が広がる中、その中から物体がまた一つ飛びかかってくる。麻衣は避けきれず、悲鳴を上げる。風紀委員は訓練された組織のはず……だが、何故こんなにも傷付いてしまうのか……実は、空力^{エアロ}使いの能力を持つ能力者にしては、やけに物体を飛ばす速度が速い。そのあり得ないスピードに困惑するのは仕方あるまい。

「チェックメイトだ」大和がこう言うと、ビルの中にある一枚の窓

ガラスに触れる。まさか……。

そのまさかだった。窓ガラスに空気の噴射点を作り、勢いよく麻衣に飛ばす。ここまでか……そう思われたが次の瞬間、雷が降ったような激しい轟音が響き渡ってガラスを打ち砕いた。破片も全て、だ。
雷……？電気の力を使える能力者は電撃使い^{エレクトロマスター}のはず……電撃使いと言うと、麻衣が知ってる限りではただ一人……背中^{エレクトロマスター}にねじがあり、手が取れたり、機械的な機能が沢山あるロボット女子高生……そう、東雲なのだけしか居ない。

案の定、その者の声は後ろから聞こえてくる。

「それ以上私の友達をイジメないで下さい……！」

「は？お前誰だ？」

大和は疑問符を浮かべたような感じで薄笑いを浮かべる。そして大きな窓ガラスに空気の噴射点を作りなのに飛ばそうとするが、麻衣がそれを止めた。

「チツ……邪魔だ……！」

大和は麻衣を突き飛ばす。だがだがその間になのが電撃で威嚇攻撃をする。しかし、怯む事は無く窓ガラスに触れて今度こそなのの方に飛ばした。

大和は戦いを楽しんでいるように見えるが、同時に焦っているような感じにも見える。何かが起こるのでは無いか、と……。

「早めにトドメを刺すか……」

大和はそう言うと、いつも相手にトドメを刺す時に使っている鉄ク

ズを取り出す。それを能力を使って勢いよく投げた。これで邪魔な無能力者どもは消え去る…そう思われていたが何か様子が変わた。
エアロハンド
鉄クズは空力使いの能力によって物体の加速度が増し、殺傷能力が生まれるはず…だが黒煙の中からは麻衣となのおられる人影が薄っすらだが見えていた。

「残念です。今のあなたには私達を攻撃する事は出来ません」

なのは強気の姿勢で大和に話す。それに対し大和は反発した。

「黙れ！！所詮は力で俺らレベル0を押さえつけるクソ共が！！」

大和は徐々に冷静さを失っていく。そしてなのの返答を待たずに大規模に、ビルの柱を飛ばす。

運良く外れるが、やはり少し負傷している。だがしかし、小さい雷柱がなのの周りでビリビリと音を立てながら走る。恐らく、なのはキレているのだろう。

「世の中何でも力だ！力さえあれば良いんだよ！！！」

大和は叫び続ける。俺らレベル0と言っているが、その言動から恐らく大和もレベル0だったのであろう。だが大和が一気にレベル3になったと言っのたろうか？

恐らくレベル0からレベル3に一気に上がるのは無理と思われる。というのも、そのような例が無い。

では何故大和はレベル3なのか…分からないが拘束しない訳にはいかないだろう。大和は力があれば、という言葉を繰り返し発言した。その大和になのは遂に本気でキレだした。

「…力、力って…何でも力で変わるって訳じゃない！！私のこの力だって…努力して芽生えたものなんです！！！」

「うるせえ！！そうやってお前らは何の能力もねえ俺らを力で押さえつけるんだ！！お前らに俺らの何が分かる！！！」

「分かりますよ、全てが！！私も最初は何の能力も無かった…だけど、頑張って、頑張り抜いて…そしてこの力を手に入れられたんです！！！」

なのはこれまでに無いくらいに怒りの感情を表に出していた。後ろのねじもゆっくりと、しかし速いような感じで何回も回っていたがなのは気にはしていなかった。

実はなののねじは感情に合わせて回るようになっていた。怒ったり、泣いたり、笑ったり…嬉しい事や悲しい事などがあつた時、回るようになっていたのだ。今のなのは怒るという感情が入っているので回っているのだろう。

「綺麗事を吐くな！！そのまま死ね！！！」

大和は鉄クズを取り出し再度なのに投げようとする。同時になのも右手を翳し、気を高めていく。

「綺麗事じゃない…努力すれば誰だってなれる…今は何の能力が無くても、いつか必ず力が付いてくる時が来るんです！！！」

なのの右手から物凄い電流が流れる。そして持っていたコインを一回トスした。その時相手が能力を使って鉄クズを投げ飛ばす。間に合うか…？

そんな心配は必要無かった。なのがトスしたコインがなのの右手に

触れた途端、雷のような轟音が鳴り響き鉄クズごと大和の隣を貫いた。そしてそのままビルを突き抜け上空へと散っていった。やはりなのも超電磁砲レールガンの能力を使えたという事になるだろう。なのは電撃使いなので本気を出せば超電磁砲の力も使える。

超電磁砲の力に大和は腰を抜かした。そこを狙って麻衣が拘束する。

「私は第179支部所属の風紀委員、水上麻衣！！エアロ事件の犯人としてあなたを拘束します！！」

麻衣は大和を拘束、警備員に連絡し事件は終息した。そしてしばらくして、麻衣となのはビルを後にした。ビルの外では祐子とみおも来ていたようだ。

「麻衣ちゃん！なのちゃん！！大丈夫だった！？」

「あ…相生さん、私は平気ですよ。ただ、水上さんが少し怪我をしましているようですが…」

「そうなんだ…でも、二人とも大きな怪我は無くて良かったよ」

祐子とみおは心配そうにしていたが、麻衣はいつものように振舞っていた。後に正確に分かった事だがエアロ事件の犯人の海藤大和は元々は全くのレベル0だった。それにも関わらず短期間でいきなりレベル3並に能力を使えるのはおかしいとの意見が多数あった。

これを受け風紀委員と警備員は調べを進める事にした。大和の能力には何か裏があるのでは無いか、と疑って…。

ともかく、事件はこれにて終息だ。明日からまた祐子達は普通に学校生活を送る事になる。祐子のバカっぷりが見れると思うと、なのやみお、麻衣は少し嬉しく思うのであった。

#03 エアロ事件（後書き）

いかがでしたか？なのも実は覚醒すると（変な意味ではございませ
んww）御坂お姉さまのような、超電磁砲の能力を使う事が出来る
という設定にしました^^

次回も出来る限り早く更新しますので楽しみに。

#04 幻想御手（レベルアップ）（前書き）

今回もなかなか下手ですorz

間違った理解をしています、仕様だと思ってご了承ください（汗）
なお、今回は短いです。

#04 幻想御手（レベルアップ）

エアロ事件の終息後、しばらくは何も事件が起きないでいた。…ついでに言うところ一年の間で必ず来る猛暑の日がやってきた。この猛暑の日には、クーラーが効いている部屋が天国になる。その天国を巡って、またまた争いが起こっていた。

「暑い！！とにかく暑いよ！！！」

「ま、まあまあみおちゃん、落ち着こうよ」

祐子は暑くて苛立ちを感じていたみおを宥める。だが祐子も苛立ちを感じてはいた。

「ゆっこ、あそこにクーラーの効いている部屋があるからそこに行こう」

祐子達はその部屋へ行こうとした。だが、一人の男子が前を通り過ぎ、その部屋の鍵を閉めたではないか。これに二人はキレた。

「…みおちゃん、ちょっと本気で行こっか」

「ゆっこ、そうだね。ちょっとこの部屋燃やそうっか」

みおは手を翳し、発火能力を使う。顔はまるで何とか王国の何とかキューブを取り返しに来たみたいに、みおの顔は暗くなっていた。だが、二人の企みはある人間により失敗となる。

「ちょっと待ったあー！！！！この部屋を燃やすなんてバカな事考

えるなあー！！！！！！」

「えっ…？」

とある人間（不幸男子）の右手が触れた瞬間、何かを打ち消す音がしてみおの発火能力が無効化された。

「君は誰？」

「俺か？俺は上条とっ…ってぬわああー！！また不良が来たああー！！！！」

「あ…ちょ……」

上条とうなんとかという青年は不良に追われていたらしい。全く、学園都市内でよく不良とそんな子供みたいな遊びが（以下略）さてさて、何事も無かったかのように祐子達は違う部屋に入っていた。

「ふう…生き返るう…」

「それにしてもさっきの人誰だったんだろう？」

「分からない…ゆっこ達、これ見て」

麻衣はどこから持ってきたのか分からないがノートパソコンを取り出した。画面には「学園都市 都市伝説」と赤い字で表示されていた。その中にある都市伝説があった。

『どんな能力も効かない無能力者』

これはいったいどういう事だろうか？先ほどの上条と何とかという青年はみおの能力を無効化した。もしかすると、この項目の正体は上条なんとかという不幸男子なのか？

「でも都市伝説なんてただの噂だよね？」

「そりゃそうだけど…」

「ないない、だったら無いよこんなの」

「…認めたくないだけだね」

「ちょ…麻衣ちゃん、違うから！！」

何かいろいろと盛り上がっていたようだが、この正体は恐らく上なんとかという青年だろう。また、他にはこのような都市伝説もあった。

『どんな無能力者でも一瞬にして超能力を得る事が出来る、幻想御手という薬がある』

この都市伝説に無能力者の祐子は凄く惹かれた。幻想御手とは、いったいどのようなものだろうか？

「幻想御手って、実在するのかな…？」

「何言ってるの、ゆっこ。ある訳無いって。それよりも、早く宿題とか終わらせないとまた廊下に立たされるよ」

「…うん、分かった」

祐子はそのパソコンを閉じた。そして麻衣がどこかに収納し、宿題を終わらせる。どうやらまだ学校があるようだが、休日のようなのだ。しばらく無言で三人は宿題を片付けていた。祐子だけはずっと思っていた事があるようだ。

（…でも幻想御手つてのが本当にあるなら…みおちゃん達みたいに能力を使いたいなあ…）

祐子はみお達にバレないように幻想御手^{レベルアップ}について調べていく事にした。そして入手ルートが分かったら…恐らく祐子はそれを手にするだろう。幻想御手を使っても問題が無いならば良いのだが…。

しばらくして夕方、祐子達はそれぞれの寮へと帰っていた。

「ふう…今日も何か疲れたなあ…」

祐子は最近買ったという携帯を取り出し、ある事を調べる。あの幻想御手についてだ。

「幻想御手…あると良いけど、あくまで噂だもんね。みおちゃんも言ってたし…」

そう言いながらも少し期待をして検索していた。携帯の扱いには割りと慣れていて、検索もスムーズに行えたようだ。

…と、検索中にみおから電話が掛かってきた。

『…あ、もしもしゆっこ？今何してるの？』

「え？あ、いや…何もしてないよ」

『そう…なら良いけど、今日のあの都市伝説…幻想御手の事についてなんだけど…もしあったとしても、絶対手を出したらダメだよ』

「…うん、分かってる。分かってるよ」

『なら良いけど…絶対ダメだからね』

みおは何度も繰り返し祐子に電話越しに言った。祐子も電話の向こうで頷き、電話を切った。
だが、しばらく調べていると…。

「……これって…レベルアップバー幻想御手…？」

携帯の画面を見ると、黒ベースの背景に赤い字でレベルアップバー幻想御手と記されていた。

祐子は最初「やっぱり…レベルアップバー幻想御手を使うのは止めよう…」と思い、ウェブを閉じようとした。

だが、画面が閉じない。何度も電源ボタンを押してウェブを閉じようとするが、しばらくすると注意書きが出てきた。

『この画面を開くと、ダウンロードが完了するまで閉じる事は出来ません。ご注意ください』

ダウンロードと書いてある。実は幻想御手は楽曲であり、不思議な

曲調である。脳に直接特殊な音波を聴き込ませ、一時的に能力を取得する事が可能である。能力の種類は勿論、自分だけの現実パーソナルリアリティによって決められる。

ダウンロードが完了するまで閉じる事が出来ないという事もあり、レベルアップバーまた幻想御手に少しなからず興味を持ち始めていた事もあり祐子は「ちよつとだけなら大丈夫…」と思ってダウンロードを開始した。

ダウンロード時間は割と早く終了し、自分の使用している携帯の音楽データの中にはしっかりと「レベルアップバー幻想御手」の文字が表示されている。

「…これを聴いたら…これを聴いたら能力が……」

祐子は早速聴こうとしたが、みおの言葉を思い出しその日は幻想御手を聴かなかった。

次の日、普通に学校へ行く祐子。携帯にはしっかりと幻想御手が入っている。

「あ、ゆっこ、おはよー」

「みおちゃんスラムツパギー」

「そついえば昨日の話…レベルアップバー幻想御手の事だけど…」

みおが言いかけたところで祐子は「大丈夫、手は出していないよ」

と言った。みおも安心し、一緒に学校内へ入っていった。そして今日も普通に授業があり、いつものように祐子は宿題を忘れ廊下立たされた。

「はあ…こんな時、能力使えたらなあ…」

祐子はふとそう思った。そして携帯に目をやる。

「レベルアップ…幻想御手、使ってみようかな…」

祐子は軽い気持ちで、イヤホンを携帯に取り付け幻想御手を聴いてみた。すると、何かが脳に浸透していくような不思議な感じに陥った。

「うつ…！な、何これ…頭が…」

幻想御手の曲調は祐子には強烈過ぎて、思わずその場に倒れてしまった。物音に気付いた教師が廊下に出る。

「相生…？おい、大丈夫か！？」

「先生？ゆっこがどうかしたんですか？…ってゆっこ！？」

みおが廊下に出てみると、倒れて一時的に意識不明の祐子を見るなり近づく。

「ねえ、ゆっこ！起きて！！起きてよ！！！！」

みおは祐子に呼びかけるが反応が無い。そして祐子が持っていた携帯の画面を見る。

「レベルアップ幻想御手…？まさか……！」

みおはすぐ学園都市内の病院に運ぶように言った。そして緊急搬送され、検査が行われた。ついでに、幻想御手についても詳しく調べを進めようとしたが祐子の携帯に入っていたものはもう消滅していたため、調べる事が困難になった。

しばらくして、祐子はゆっくり目を覚ます。

「ん…？ここは…どこ…？」

「気がついた？ゆっこ…」

みおは静かに声を掛ける。祐子は「うん…何とも無いけど…」と返答する。

「…あのさ、ちょっとゆっこに聞きたい事があるんだけど…」

「何？」

「幻想御手の事について…あれ、使ったの？」

祐子はしばらく黙った後、重い口を開いた。

「…ゴメン、使ってしまった…」

「…そつか…。そんなに、能力を使いたいの？」

「うん…だって、みおちゃんとか麻衣ちゃんばかり使えて、私は何一つ使えないんだもん…嫌だよそんなの」

みおはため息をついた後、祐子に能力を使うように言ってみた。そして能力を使うと、小さな風が祐子の手ひらに渦巻いた。これは空力使いとは少し違う、風力^{エアロシユウタイ}使いの能力だ。レベルが低いだけなので単に風を発生させるだけに止まる。空力使いと風力使いの違いは気体や風を操作する能力。空力使いは触れた物質に空気の噴射点を作ってそれを飛ばす能力だ。

異なると言ってもレベル0の段階では同じであり、レベル3以降から分岐する事になる。

「これで満足？」

「うん、能力が使えただけでも嬉しいよ！」

「そう。それは良かったけど、もうあんなの使ったらダメだよ？今日みたいな事が起きるかも知れないから」

「分かってるって。今日の事は許してヒヤシンス」

祐子はいつもの余裕が出てきた。みおも笑顔になり、その後はいつものような雑談を交わすのであった。

…だがこの幻想御手が、今後学園都市に大きな事件を齎す事は二人は…いや、学園都市の生徒達はまだ分からなかった…。

#04 幻想御手（レベルアップ）（後書き）

やっぱりいろいろと可笑しいですが何度も言うように仕様だと思っ
て下さい（汗）

この小説いつまで続くかな… or z

#05 幻想猛獣（AIMバースト）（前書き）

スランプ状態になりつつありますがようやく続きを上げる事が出来ました！全然面白くないですが読んで下さいm（――）m
あと、完全にキャラ崩壊してます（泣）

#05 幻想猛獣（AIMバースト）

次の日、祐子は退院し問題なく学校へ向かった。勿論能力も使える。

「みおちゃん麻衣ちゃんスラマツパギー！いやゝ、今日も暑いねゝ」

「あ、おはようゆっこ。確かに今日はいつもより暑いねゝ」

そりゃそうだ。天気予報によると最高気温は例年より1〜2度高い30度。日差しは真つ青な上空から照りつけるんだからそりゃあもう暑いったら暑い。

だがそんな暑さなど気にせず、科学者達は幻想御手について調べていた。そして分かった事が一つ。

『幻想御手を使った者は一時的に能力を得る事が出来るが、一定期間を過ぎると昏睡状態に陥ってしまう』

…これを見て、科学者相当マズイと考えた。実際、空力使いの海藤大和は幻想御手を使っており、そして昏睡状態に陥ってしまったている。もしかすると…いや、もしかしてではなく、祐子もいずれは昏睡状態に陥ってしまう。しかし一つ気になる事が……幻想御手を使うと本当に使用者が昏睡状態になるだけに留まるのだろうか？

科学者の間ではこんな噂が出回っていた。あくまで噂ではあるが、^{AIMバースト}幻想猛獣というものが存在するらしい。幻想猛獣とは、恐らく名前からして幻想御手が関連するものらしいが詳細は不明。しかもあくまで噂。

だが、科学的な理論から考えれば幻想猛獣が存在しないとも言いきれないし、存在するとも言いきれない。

もし存在するとして、いったいどういうものかは気になるが、科学

者達は幻想御手についての詳しい調査を進めていく事にした。

祐子が幻想御手を使ってから一週間、未だ特に変化はないものの時折頭痛が来るといふ。やはり幻想御手によるものだろう。

なお、この日病院にあの海藤大和が意識不明の状態で運ばれてきた。昏睡状態に陥っている。

やはり大和も幻想御手の使用者だったようだ。その根拠に、脳の一部が正体不明の何かに侵されている。黒い影が、レントゲンにはつきりと写されていた。

科学者達は「これはいったい何なんだ？」と驚きを隠せず、調査を進めるばかりに留まっている。

詳しい事は分からないが、とにかく何かが起こりそうだと予測し、嚴重に観察する事にした。そうしてしばらく嚴重に観察はしていたのだが、突然大和は苦しみだす。原因は不明、そして身体からは何かが放出される。

祐子も同じようになっていた。突然倒れ昏睡状態になる。そのまま病院に運ばれるが意識は戻らない。

「いったい何が…？」

みおはふと、外を見る。すると、まだ形にはなっていないが怪しいものが渦巻いていた。その時、みおの背後から声が…。

「あれは恐らく…最近噂である幻想猛獣だよ」
A I Mバースト

声を掛けたのは科学的兼医師の木山博一。きやまひろかず彼は科学者の中でも優秀であり、更に医務室にて患者の治療も行なっている。

「A I Mバースト…？」

「そう。幻想御手とかいうものを使用した人が、一定の期間を超えたら昏睡状態になるんだ。多分、その使用者の魂が集結して恐ろしい怪物みたいなものが出来る。その怪物みたいなものが幻想猛獣だA I Mバーストと思うんだ」

みおは「そうですか…」と答え、窓の外を見る。やがて渦巻いていたものは上空に昇り、大きな輪を描く。

「あれ…何とかならないんですか？」

「…僕もさっぱり分からない。今までに見た事は無かったからね。ただ、あれにも核みたいなのはあるはずなんだ。それを何とかして破壊できれば…」

「核みたいなのを破壊…ありがとう！木山さん！！ゆっこを助きたいから…みんなを助けたいからちよつとあそこに行ってくださいす！！」

「あ…ちよつと…」

木山が呼び止める前にみおは外へ行ってしまった。

「…まあ、能力者のあの子なら大丈夫だろうね。警備員や風紀委員

も総動員しているし」

木山はみおを信じて幻想御手を使用した1万人の帰りを待つ事にした。

一方、みおは病院から出て現場へと向かっていた。辺りは既に幻想猛獣が出現しているのか、ビルが幾つか崩壊していて黒煙が上がっている。ちょうどなのと合流もしたようだ。

「なのちゃん！！無事だったんだ！」

「長野原さんもなんですね！！」

なのは慌てた様子で返答する。そして走って幻想猛獣が発生しそうな場所へと行く。

一方、その発生しそうな場所では既にある者と風紀委員・警備員との戦闘が始まっていた。

ある者とはそう…他でもない幻想御手を開発した北山だ。名は不明である。

「ふん！甘いわ！！！」

「ちっ…なかなかやる奴だな、流石は幻想御手を作ったボスだな」

「先輩…私も力になります」

「水上、悪いがお前はまだ傷が癒えてないだろ？少し休んでな」

麻衣はそう言われ仕方なく現場を離れ体力を回復する。その間武夫は念動能力を使い応戦した。

「ふふ…こうしている間にも1万人分の能力者子供達の意思は集まっ
てきているだよ!!」

「くっ…早いとこコイツを仕留めてあれの集結を止めさせなければ
…」

「おら、ボサつとすな!!」

北山は手榴弾を数発投げた。爆炎が一気に広がる。

「ふうー、危ない危ない」

「まだまだ行くぞ!!」

北山は重力加速を利用した能力を使用する。グラヴィトンとでも言
っておこうか。

「あの北山が使ってる能力…噂には聞いてたが凄いな」

武夫は少し感心していたが、そんな暇は無いとすぐに移動し念動能
力による攻撃を続ける。

一方で、みおとなのは麻衣と合流する。

「麻衣ちゃん！大丈夫？」

「何とか…だけど先輩が今戦っている」

麻衣に言われみおは幻想猛獣の発生場所付近をみてみる。するとそこにはもう、固まった砂の下敷きになった武夫が居た。重力加速によるものだろう。

みおはその事を麻衣に伝えた。すると麻衣は飛び出し、すかさず能力を行使する。

「先輩をよくも…！」

「おらどうした？もつと来い！」

北山は重力加速を使い、麻衣に物体をぶつける。不幸にも命中し、麻衣は悲鳴を上げる。

「麻衣ちゃん…！！」

みおは苦しむ麻衣を見て言葉を一瞬失った。ついでに言うと、能力を使える自信も失くした。自分が能力を使ったところで麻衣を救う事は出来るのだろうか、と…。

だが迷っている場合では無い。とりあえずみおは自身が持つ発火能力パイロキネシスを使う。

「とにかく、やるっきゃない…！！うりゃああああ！！！」

「…？お前、どこに能力使ってた？」

北山は鼻で笑っていた。それも、みおの放った火炎は北山を狙ったはずが全く違う方向に飛んでいる。コントロール機能はまあ…みおの事だから少しというか大幅にズレるのだろう、だがこれは酷い。学園都市内に立つ大きな橋に当たってしまう。

そして北山が重力加速を使って武夫と同じような状態にしようとしたその直後、北山の背後から物凄い何かが北山の体を掴んだ。

「な…何だ!？」

「あ…今まではつきりと見えなかった幻想猛獣が、具現化した…あれが1万人分の幻想御手使用者の魂なんだ…」

北山は必死に足掻いたが、勢いよく投げ飛ばされ完全に気を失った。安心している間は無い。幻想猛獣はみおを発見すると襲ってきた。

「うわあっ!と、とりあえず炎を…!!」

みおは手のひらから火炎を発生、幻想猛獣に向かって放出した。その火炎は見事当たり、幻想猛獣は怯んだ。

その隙になのが武夫の元に向かい、指先から電流を流して砂鉄に変換、固くなっていた砂がサラサラになり救出出来た。

「大丈夫ですか？」

「まあ…ギリギリ生きている状態だな…俺とした事が……」

武夫は腹部を軽く押さえながら話す。その後応急手当を施し安全な場所で休ませた。

その頃みおは、^{AIMバースト}幻想猛獣を相手に応戦中だった。火炎のコントロールはイマイチだが…。

「一方的に攻撃するんじゃないって核を探さないって…」

みおには多少の傷はあるものの、まだ戦ってはいる。

だが木山が言っていた「核」が見当たらない。それさえ見つける事が出来れば集中攻撃を仕掛けて倒す事が出来るのだが…。

そんな事を考えている内に危ない状況に陥る。幻想猛獣の触手のようなものがみおを狙ってくる。だが、火炎を発生し寸前で防いだ。

「ふう…危ないね、本当に…」

みおは一息つき、体勢を取り戻す。だがその時、どこからか強い衝撃が背中から伝わった。

「うつ……!!?」

みおは何かに突き飛ばされてしまい、コンクリートの柱に当たって気を失った。みおを襲ったもの…それは幻想猛獣の触手。実はもう一つあるのだ。みおは見えてなかったのか、もう一つの存在に気付かなかった。そして、その触手の強い一撃を受けてしまった、という事になる。

『ギヤアアアア!!!!』

幻想猛獣の雄叫びが学園都市内に響き渡った。そしてなのもそれに気付いた。

「長野さん…!!」

なのはみおに呼びかけるが反応は無い。これっぽっちも反応する気

配は無い。気を失っているだけとはいえ、少し不安になる。

「長野原さん！！起きてください！！」

尚もなのは呼びかけるが反応はしない。そのうちに背後から幻想猛獣の触手が近づいてくる。

「きゃあっ！！こ、来ないでください！！」

なのは指先から電撃を出して二本の触手を一気に消滅させた。可愛い顔して意外に強いというのはなの事だろう。しかもなのを使う能力は電撃ときた。大半は電気により発生する熱で焼き殺せるだろう。

ともかく、これでしばらく幻想猛獣は触手による攻撃が出来ない。

「とりあえず、長野原さんを安全な場所に移動させないと……！」

なのはみおを抱え、とりあえず安全な場所へと運んだ。そして再び幻想猛獣の居る場所へ。

「うう……怖いです……」

なのは足が震えていた。そりゃあ人の何十倍もある、まさに怪物級の相手を目の前にしているのだから。だが、恐れてばかりでは救えるものも救えない。それになのは電撃使い、電撃を出せばある程度のダメージは与えられるだろう。

なのは、指先から強い電撃を放出する。すると幻想猛獣は悲鳴のような咆哮を上げる。幻想猛獣の体は既にボロボロで、今にも倒れそう。倒れそうなのだが……。

『ギヤアアアアア！！！！！！！』

再び大きな咆哮を上げた。幻想猛獣の体はやや液状の物質で出来ている。それがどうした、と言いたいところだろう。実は幻想猛獣は『核を破壊しない限り失われた部分は何度でも再生する』のだ。再生するとは…実に厄介な相手だ。

案の定、奴は失った触手を再生した。

「え…！？い、今、再生しました！？」

なのは驚いた。幻想猛獣の事についてはあまり詳しくはないようだが、はかせなら知っていただろうが…。ともかく、触手が再生した今、戦闘力は元の状態にまで戻りなのは苦戦する。

「はあっ！…でも、これだといつまでも戦ってないといけませんよね…どうしよう…」

なのはそう考えていた。だがそんな事を考えていて動きが鈍り、幻想猛獣の攻撃を受けてしまいそうになる。寸前で電撃を放出し、防いだようだが…。

と、幻想猛獣の様子が変だ。何が起こるのだろうか？

「…？！じ、地震ですかっ？！」

なのは驚く。地震のように揺れているが、幻想猛獣は地面に根を生やしていた。もはやどんな生物かも分からない。脚のようだが、それにしても長すぎる。

幻想猛獣は脚を使い、何もない平地の向こうに見える、ゆっこ達が居る病院を見る。この時なのは悟った。『あれは間違いなく病院を狙っている…病院を破壊しようとしている』という事を…。

「だ、ダメです！！そうはさせません！！」

なのは電撃を使って足止めを図ろうとした。が、脚部になると全く効いてないようだ。

「そんな…電撃が効かない…！？」

なのは焦った。そして、幻想猛獣側からしたらその小さな体を奴の前で大きく張って防ごうとする。

「こ、ここから先は行かせません！！」

なのは目を瞑った。幻想猛獣の足音は鳴り止まない。

それからしばらくして、まだなのは体の感覚がある事に気づく。普通は幻想猛獣に蹴られ掴まれ飛ばされて、死を迎えているはず…なのは目を開いた。するとそこには、水色の髪に若干のツインテールの髪型の少女…みおだ。

「なのちゃん…ゴメンね…私、ちょっとだけ眠っちゃってたよ」

「長野原…さん…？」

「でも大丈夫…ゆっこを…幻想御手を使った皆を助けるよ！！」

みおの手のひらには炎が広がっていた。そして幻想猛獣の胴体にも

大きな空洞が出来ていた。しかも動きが鈍くなっている。

「さあ！あんたの相手は私だよ！！」

みおは炎を幻想猛獣に向かってばら撒く。幻想猛獣は悲鳴のような咆哮を上げる。

「長野さん…」

なのは突然の事に腰を抜かしていたがすぐに立ち上がった。

「長野さん！私もお手伝いさせていただきます！！」

「ならなのちゃん、私がある程度あいつを弱らせたらのちゃんと私でトドメを刺そう！」

なのは大きく頷き、電撃のエネルギーを高めていく。その間、みおは炎をぶつけていく。

「よっし！ゆっこの為にも…ここで負ける訳にはいかない！！」

みおはテンションを上げていく。そしてなのも…。

「能力というものは、決してすぐには付きません…しかし、努力をしてこそ能力は付いてくるもの…一度や二度、失敗したって良いじゃないですか！私達が付いてます！だから相生さんも安心してください！！」

なのの周りには小さな雷柱が走る。その蒼白く輝く雷柱が…。ある程度弱らせたみおはなの元へ駆け寄る。そして核なる部分を

発見し、なのとみおはお互いに気を高める。そして…。

「また明日から、いつもの日常を過ごそう！たとえ失敗したって良い…そこで諦めたら、試合終了だよ、ゆっこ！！いや、無能力者の皆！！」

「これが…私達の本気です！！」

なのとみおは同時に能力を放出した。炎と雷の見事な融合は、大きな轟音を出し幻想猛獣の核の部分貫いた。そして天まで上り、幻想御手の本体は粉々に破壊された。その様子を木山はしっかりと見ていた。

「あの子達には、決められた力以上の何かがあるのかも知れないな。そしてあの子達が日々過ごしている日常とは、実は奇跡の連続なのかも知れない…ふっ、ああいう子達を見て良かったな」

木山は笑顔を見せた。一方、核を破壊された幻想猛獣は幻想御手と共に消滅していた。それを見たみおとなのは…。

「やりましたね！長野さん！！」

「やったね！なのちゃん！！」

二人は喜びを分かち合っていた。祐子達を…幻想御手を使った無能力者達を救う事が出来た事に。その後、警備員が到着し幻想御手を作ったとされる北山はすぐさま拘束された。麻衣と武夫も気を取り戻したようだが二人とも風紀委員として何も活躍出来てない事を少し気にしていた。だが、なのの「今回失敗したとしても、次がありますよ」という言葉を聞いて、すぐに元に戻った。

しばらくして、真っ赤に燃えた夕日が見える夕方…みおとなのは病院に向かっていた。そしてその先に居たのは、他でもない幻想御手を使った祐子。幻想猛獣の消滅により、幻想御手使用者は次々に意識を取り戻した。海藤も意識を取り戻し、少しずつ能力を付けていく事を誓ったようだ。

「ゆっこ……………」

「みおちゃん…スラムツパギー！いや…今日は天気が良いから、テンキーでも買っちゃおうかな…」

祐子はいつものように立ち振る舞った。みおもその祐子の様子にため息をつき、笑顔になる。

「全く…ゆっこ、もうあんなの使ったらダメだよ？」

「分かってるよう、今度は気をつけるよ」

みおは「ゆっこは本当に分かってるんだろう…？」と思ったがそれでも祐子の言葉を信じてそれ以上は何も言わなかった。

「相生さん、元気になられて私も安心しました」

「なのちゃん、ゴメンね…ちょっとだけ…と思って使ったらこんな事になるなんて思いもしなかったよ」

祐子は謝った。なのもそんな祐子を許し、久しぶりの雑談のように話していった。

そして祐子はみおにひとこと。

「みおちゃんのあの台詞…『諦めたらそこで試合終了だよ!!』って台詞、ちゃんと届いたよ。私も、諦めずに頑張ってみるよ」

「ゆっこ…約束だよ。あと焼きそばを、焼きそばと間違えるなんてもう止めてよね」

「う、うん…分かったよ」

祐子は少々苦笑しながらも返答した。今回の事件で、学園都市は多少の被害が出た。本当に多少で修復すべきところはモノレールが通っているレールの下の柱ぐらいだと言う。

幻想猛獣との戦いは一筋縄ではいかなかったが、みおとなの、風紀委員の二人の活躍により消滅した。これ以上、同じような事件を起こさない為にも、幻想御手も破壊した。

事件は終結し、みお達のいつもの日常がまた明日から始まる…。

因みにこの日の気温は高くみお達は暑さにバテかけるのであった。

#05 幻想猛獣（AIMバースト）（後書き）

次回もいつ更新するか分かりません…自分の作品に自信を無くして
いますが頑張っていきますm（|）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9236y/>

とある日常の超常日常（アブノーマルデイリー）

2012年1月1日22時47分発行